パラサイトドリーム

もみじ珠熙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラサイトドリーム

【Ｎコード】
Ｎ２０８５Ｙ

【作者名】
もみじ珠熙

【あらすじ】
過去の傷を抱える楓。担当医である町田。楓に憧れる美羽。楓の前に現れはじめた謎の少年。
楓はしだいにおかしな夢を見るようになる。その夢で繰り広げられるストーリーと、現実の世界で繰り広げられるストーリー。
２つの世界で楓が見るものは…。
実際に私が見た夢を題材に書きました。

僕らの世界（前書き）

これから始まるストーリーの幕開け、
第一話です。よろしくお願い致します。

僕らの世界

私は何故、ここに生き、ここに在るのか、いつも問い続けてきた。
ここにいたいから、と望んだわけではない。
ただここが、私に用意された世界なだけなのだ。
だから、ここで生きるしかないだけ。

ただ毎日を、この世界の法則に従い生きる。

＞i３４１２１―４３３３＜

冬の風邪はとても冷たく、彼女の両手はコートのポケットへと移動した。
長い黒髪に黒のＰコート、黒のロングスカートに黒いブーツ。全身真っ黒で彼女は病院に現れた。受付に診察券を渡す。
受付の看護婦が、優しい笑顔で問いかけた。
「あら、楓ちゃん、今日はいつもより早いわね？診察時間まで待っててもらえるかしら？」
表情を変えずに、彼女は頷き、待合い室の端の椅子に向かった。
チラリと時計に目をやると、１０時３０分。
予約していた診察時間は１１時だ。
いつもはギリギリにしか来ないが、今日はいつもより３０分も早く着いてしまったことに、彼女は少し驚いていた。

担当医である町田は、目尻にカラスの足跡のような皺をつくり、楓を迎え入れた。
「こんにちは。体調はどう？」

「特に変化はありません。」
「そう。今日はいつもより早めに来てたみたいだけれど、何かあったのかい？」
町田は、パソコンに向かい、キーボードに指をのせながら、楓に問いかけた。
「意識して早めにきた訳じゃありません。ただ…」
楓は言葉を考えている様子で、しばらく宙を見ていた。
そのうち、淡々と話し始めた。
「最近、声が聞こえてくるんです。
はっきりとじゃあないんですが、声が。
私の心の声と言うわけではなくて、他人の、それも知らない声で。」
町田のキーボードを打つ音が響く。
「その声は、君に話しかけてくるのかな？」
町田は、手を止め、楓の表情を確認するかのように見つめる。
「話しかけているのかはわかりません。だって私はその声に返答しないし、そうするとその声が、無視しないで！と言うわけでもありませんから。」
また、カタカタと町田の指が動き始めた。
「ふぅん、そうか。例えば、その声は、何て言っているのかな？」
「はい、君は一人じゃない、と言ってきたことがあります。後、覚えているのは、迎えに行くから、と。」
「君を迎えに行くということ？どこに迎えに行くんだい？」
「さぁ。知りません。」
「先生はピアノ弾けますか？」
「なぜそんなことを聞くの？」
「先生のタイピング、ピアノみたいだから。」
「あぁ、そうだね、でもピアノは弾けないと思うよ。触ったこともないんだ。」
「ふぅん、期待外れです。」
「はは、ごめんね。」

町田は謝りながらも嬉しそうに笑った。

楓を見送った後、町田はパソコンに向かい、気が重くなった。何か悪いきっかけがあったんじゃないだろうか？薬のせいだろうか？彼女がこれ以上ふさぎ込む姿は見たくない。
彼女の傷をえぐるようなことがなければいいのだが。

楓と初めて出会った日を、今でも忘れない。
八年前、楓は中学２年生、僕は２８才で、当時楓の担当医は僕の父であった。僕は新米だったから、父の後ろで二人のやり取りを見ていただけだった。

楓はどんなに父が優しく接しても、父に怯え言葉も上手く話せずにいた。かと思えば、これは夢だ、夢だ、とわめき、自分を殴り始めた。

事件のことは知っていたので、そんな楓を見ていると胸が張り裂ける想いだった。

父が引退し、僕が独立すると同時に、楓はここに来るようになった。
楓は２２才になり、大人になったのに、今でも傷は深いまま、孤独に生きている。
事件の犯人も見つからないままだ。
楓を抱きしめてやりたいと何度も思うが、立場上、僕に出来るのはカウンセリングし、薬を出す以外何も出来ないのだ。
今日の発言は明らかに症状の出始めだ。
僕はなんて、無力なんだろう。
町田は、光が眩しく感じて、カーテンを閉めた。

僕らの世界（後書き）

読んで下さった方、どうもありがとうございました。
感謝です！
これからゆっくり話が動き出していきます。
次回もよろしくお願い致します。

彼女の世界

「うぉぉおおお！！！」

彼女は大きなナイフを取り出し、勢いよく走り出した。そしてぐっと両膝を曲げ、地面を蹴り上げると、宙に舞った。
まるでワイヤーアクションのようだ。
しかし彼女は吊されているわけでもなく、羽が生えている訳でもなさそうだ。
普通ではあり得ない高さまで飛んでいった。

そして、ゴジラのような巨大な敵？らしき怪物と戦い始めた。
先程取り出したナイフを怪物の頭に突き刺す。

「ヴォオオアアアア！！！」

怪物は機械音のような悲鳴をあげた。
タコのようにウネウネとした腕を、彼女に向かって伸ばすと、その先が巨大なライフルに変化し、バンバンバンッと銃声が鳴り響く。
彼女はそれらをすべてスルリとかわし、怪物の足にナイフを突き立て、動けなくしてしまった。

「もう遊ぶの飽きたわ。悪いけど、死んでもらうよ。」

彼女は素手を怪物の眉間の辺りにつっこんだ。
そこはさっき、ナイフで突き刺した場所だったので、素手のパンチでも充分に威力を発揮したらしい。

「ギャアアアアウウウウ！！！」

叫ぶ怪物を尻目に、彼女は穴の開いた場所を両腕で押し広げ、しまいには頭を真っ二つに割ってしまった。

ズドォーン

怪物は白目を剥き、口から何かドロドロしたものを出していた。

「きったない死に様ね。頭、腐ったカボチャみたいよ。あははっ！」

彼女は血まみれになった身体で笑っていた。

夢だ、変な夢を見ているんだ、私。

気づいた瞬間、はっとした表情で彼女が振り向いた。顔を見て、背筋が凍った。

私と同じ顔―

「あ。」

楓は目を覚ました。

いつもと同じ天井。いつもと同じ部屋。よかった。すごく気持ち悪い夢だった。

そっと壁に頬をつける。ひんやりと冷たい。ふと思い出が頭をよぎる。母さん、兄さん、翼。私だけ、どうして生きているんだろう。一人ぼっちの世界は、重く、暗い。先生だけが、唯一の存在だ。でも、いつか先生も私を見捨ててしまうんだろう。人は何故、今起こってもいないことを、不安に感じるんだろう。自分が傷つくことを

こんなにも恐れるんだろう。強くなりたい。

《楓、楓、》

呼びかける声が聞こえた。
またか。

鳥の鳴く声が遠くで聞こえ、ガヤガヤと雑談する声が近くで聞こえた。講義が終わった合図だ。次はなんだっけ。
楓は教科書をまとめ、席をたった。

「君は死にそびれたと思っているようだけれど、実際は心が死んだんだから、死んだ彼らとなんら変わらないよ。」

ゆるいパーマをあてた少年が、そこに立っていた。
＞ｉ３４１５０―４３３３＜
「あなた、何を言っているの？」
眉間に皺をよせ、不機嫌そうに楓は言葉を返した。
「事実。」
彼は、にやりと口元が動いた。
気持ち悪い存在を無視することにし、楓は颯爽と歩き出した。人とはなるべく関わりたくない。吐き気がしたので、トイレに向かった。

彼女の世界（後書き）

読んで下さった方、どうもありがとうございました。
少し、物語が動き始めました。
次話もよろしくお願い致します。

憧れる者、怖がる者。

彼女はいつも遠くを見つめていた。
遠く、というよりも、私達には見えない何かを見ているようだった。
初めて今日、彼女が誰かと話しているのを見た。
すごくドキドキした。
彼女は私の存在なんて知らないだろうけれど、いつか話をしてみたい。彼女の笑う顔が見てみたい。友達の真帆や満、間宮君も、彼女に興味あるみたい。
彼女の長い黒髪に憧れて、私は髪を伸ばした。あの影のある雰囲気は、私に出せそうにはないけれど。
来年、卒業するまでにせめて一度でいいから話ができたらいいなぁ。

「美羽〜、あんたレポートの課題いつ出す？」
「えっっ！！？あ、ああ、ごめん、何？もう一回言って？」
「…もういいよ。また妄想の世界に入り込んでたんでしょう？」
満はくりくりと短い髪を指でいじりながら睨み付けた。
「うーん、妄想っていうか、なんて言うか…
あのさ、城崎さんって、彼氏とかいるのかな？」
「はぁ？」
「いや、だって結構美人さんだよね？でも大学で一度も誰かと話してるの見たこと無いし、あっ、でも今日誰かと話してたみたいだったから…」
「まさか、あんた、女が好きなの？？！」
驚き、声を一段と高くして満が叫んだのでこっちまで驚いてしまった。
何てことを大きい声で言うのよ、本当にやめてよ。

家に帰ると、人が立っていた。恐怖になり、パニックを起こしてしまった。
「何、してるの？」
教室で話しかけてきたあいつだ。
何故、私の家にいるんだ？どうやって入ったの？血の気が引いていく。呼吸が苦しい。
「君はどんな家に住んでるのか気になって、入ってみた。」
パーマ少年はくるりと振り返り、にやりと笑う。私は彼に返す言葉が出てこなくなり、すぐに病院に電話をかけた。

「先生！知らない人が私につきまとっているんです！誰かわからない！勝手に家に入ってきた！学校にもいた！きっと私のことを見張ってるんだ！怖い！」
彼女は久々にパニックを起こしていた。息を切らせながら、ボロボロと涙を流している。
「楓ちゃん、大丈夫だよ。ここには君と僕しかいないから。大丈夫。僕は君の味方だ。」
彼女は泣きながら事情を説明してくれた。
とりあえず薬を処方したが、もし効かずに悪化してしまえば、入院も考えなければならない。普通は多大なストレスを感じた場合に、こういった悪化が見られるのだが、今まで特にこれと言ったきっかけはなかったはずだ。
原因を突き止めなければ、治療することも出来ないし、どうしたものか。
帰宅の準備をしていると、受付の看護婦が声をかけてきた。
「先生、楓ちゃんがまた来ています。どうしますか？」
「一旦帰ったはずじゃなかったのか？」

「帰ったと思いますが、また来てるんです。でも受付に来るわけではなくて、ずっといつもの席に座って眠ってるんですよ。起こした方がいいですよねぇ？」
「いや、何か話があって来たのかもしれない。さっきはパニック起こしていたからね。上手く話したいことが話せなかったのかも…。僕が残って話を聞くから、君はもう帰っていいよ。」

病院に二人っきりになったが、彼女は相変わらず寝たきりで、起きる様子がなかった。睡眠薬でも飲んだのだろうか？
しばらく様子を見ていると、彼女が急に叫び声をあげた。
「足が！足が！足がない！」

憧れる者、怖がる者。（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます。
まだお話は続きます。

第一の被害者

「おい！楓！」
考えるよりも先に手が彼女の肩にのっていた。
「せんせ…。」
楓は目を覚ましたが身体を震わせて瞳孔までも小刻みにゆれていた。
「私、足を切り落としたんです！足を！」
「それは夢での話だろ？」
「私最近おかしな夢ばかり見るんです。
私と同じ顔の同じ格好の人が、ただひたすら闘う夢なんですけど、
今日は人を、人を相手に戦っていて、人の足を切り落としたんです。
足を！」
「大丈夫だよ。夢の中の話なんだから。もしかしたら睡眠薬が合わないのかもしれないね。明日、処方してあげるから、明日も来れるね？」
彼女は震えながら、うなづき帰っていった。

古川はその日、苛つきながら家に向かっいた。もう１１時過ぎだ。あの糞上司め。あいつのせいで残業までさせられて、明日だって朝早いのに。あーぁ、大学生のころは楽しかったなぁ。社会人がこんなに大変だなんて、思いもしなかった。あぁ。
携帯の着信に気づき、古川はカバンの中をあさぐりはじめた。
すると突然後頭部に鈍い痛みが走った。

楓は朝のニュースをみて、思わず固まってしまった。

「昨夜、帰宅途中のサラリーマンが突然何者かに後ろから頭を鈍器なようなもので殴られ、足を切断されるという悲惨な事件が起きました。
未だ犯人は見つかっておらず…

第一の被害者（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました（＊´∀｀）

まだ続きます。

惹かれる姿。（前書き）

今回少なくてすまみなせん！

惹かれる姿。

偶然だと、言い聞かせていた。
ニュースの内容と夢が一致するなんて、よくある話であり、テレビ番組でもよく予知夢を見る者が取り上げられているではないか。
何も私が恐れることではない。
そもそも被害にあったサラリーマンなんて会ったこともなければ、名前すら知らない。知らないんだ。知らないんだ！！！
さぁ、準備をして大学へ行こう。

しかし、それから1ヶ月に何度も戦い続ける夢を見続けた。
その間、ニュースにでた事件に似た内容もいくつかあった。
予知夢が見れるようになったのだろうか？
だんだん恐怖も薄れていき、次第にこの夢を見ることに抵抗がなくなっていった。
もっとも、楓には、夢で戦っている、自分に興味があった。顔も背格好も間違いなく私自身であるが、彼女は私とは違い、生き生きしていた。時に声高らかに笑う時もあり、普段の楓とは正反対の性格のようだった。

わたしは、こんなに、あかるい自分で生きていきたい。素直に笑ったり、戦い、かっこよく敵を押さえる。
まるで、あの事件以来の私だから。

惹かれる姿。（後書き）

よんでいただきまして、ありがとうございました！まだまだ続きます。

二人の天使。（前書き）

前回の投稿した記憶がないのですが、酔っぱらっていたのかな？（笑）
今回はしらふですよ！

二人の天使。

今日は私にとって、記念日だ。
「初めて記念日」
思わず手帳を手に取り、日付に花丸をつけてしまった。
こんなに浮かれるような話ではないかもしれない。でも私にとっては、すごく嬉しい話なのだ。彼女の名前を呼び、彼女が私の名前を呼んだ。まるで憧れの先輩から第二ボタンをもらうときのように、ドキドキした。
そんなことを考えていると、くりくりしたショートヘアの満が「よっ！」と手を振り近づいてきたので、思わず手帳を鞄にしまった。

「美羽～っ！待った？ごめんね。」
「ううん、大丈夫だよ。ここのココア、すごく美味しいね。」
「そうでしょう？私が雑誌でみつけたカフェだからね！そりゃ旨いわよ。」
両手を腰に当て、えへんといわんばかりに胸をはる満。
「満も何か飲めば？ほら、これとか、可愛いよ。くまさんの絵、かいてくれるカプチーノだって。」
ほわほわの泡にくまさんが笑っている写真がメニューにうつっていた。
しかし、満は怪訝そうに見つめ、
「こんな女の子らしいの飲めるかっ！やっぱりビールよ、ビール！」
…カフェを探してきたわけじゃなくて、お酒が飲めるカフェを探してきたのか、満は…。
なんだか少しがっくりした。
が、これが満なのである。
中学校からずっと一緒にいる。
常に二人一緒というわけではなく、なんとなく、中、高、大と同じ

になってしまっただけで、満はよく、私を幼なじみだと友達に紹介してくれていた。でも私は、特別に彼女を幼なじみだとか、親友だとか思ったことはなかった。
私の考えている幼なじみで親友は、猫のマークスだけである。
ぼんやりと自分の爪をながめていると、満が、急に席を立ち、外へ出て行った。携帯も持って行ったから、電話しにいったのかな？
すると、あっという間に戻ってきて、満の腕には、知らない女の子が顔をのぞかせていた。
「はっはじめまして！」
思わず席を立ち、挨拶をする。
満が、友達を連れてくるなんてよくあることなので慣れっこだが、まだ少し緊張する。

「あなたが美羽ちゃんね。私、ｓｅｌｎａ，セレナよ。よろしくね。」　手が差し出された。
＞ｉ３５５９１―４３３３＜
「ハーフなんですか？」
その手を握りしめながら聞いた。
「ふふ。わからないわ。私には謎だらけなのよ。パパもママも知らないし、ただ私にはやりたいことが一つだけあるの。きっとそのためだけに生まれた天使なんだわ。」
にっこりと、こんなに爽やかに自分を天使だと言う彼女におどろいた。

ふんわりと結ったお団子ヘアが可愛く、彼女はまるで、自由人だか、芯がしっかりしているタイプといった雰囲気や話し方であり、美羽は少し彼女に興味を持った。

「最初にセレナと出会ったときはさ、ビックリしたよ。なんか、道端ですっげー綺麗なお姉さんがお店出してるからって、噂があったから行ってみたの。」
満が身振り手振りでわかりやすく説明してくれた。
「いってみたらさ、彼女が石をゴロンとやって、占いみたいに、あなたはこうだ、とか一人一人に当てていくの！そしてバーッと並べられてる綺麗な絵から、これがあなたを救ってくれるわ。愛を込めて。て差し出すのよ。不思議なことにみんな買っていって即完売。悔しかったから、おねーさん、もうないの？ってきいたら、友達になってくれたらあなたのために書くわ、って言われてから友達なの。」

満が言うにはセレナは普通のタンクトップにジーパンだったらしいが、やけに妖しい雰囲気が漂っていたらしい。
あとは頭や腕や足首につけるアクセサリーも飛ぶように売れていったらしい。

「それで、セレナさんの本業って一体？」
思わず聞いてしまった。

「私はね、絵描きなの。全然評価は得られないけれど、ずっと書き続けているし、これからも生きてる限り書き続けるわ。
ただ、最近、無表情の人間の表情を書きたいの。意味、わかるかしら。私、その人のバックグラウンドがオーラでみえるの。」

思い当たるモデルがいるわけだ。
それで満は私にセレナを紹介したのね。

今日は休日で、なるべく人ごみをさけようとして買い物の途中、満から連絡があったので、少し早いが指定されたカフェによった。
すると、相席でもよろしいですか、と聞かれ、連れて行かれた席には黒髪の私の憧れる女性が座っていた。
「楓さん…ですよね？！」
なぜ、名前を知っているのかと不思議そうだったが、とくに気にせず、席に座った。
「私、心理学部の美羽です、高橋美羽です。しりませんか？何度か同じ講義もうけてたんですが…。」
「ごめん。あまり人に興味ないから。」
「そうですか…。」
楓は店員を呼び、「あんた、まだ頼んでないでしょ？ホットココア２つ。」＞ｉ３５５９２―４３３３＜
勝手に決められ、少しショックだったが、まさか、夢にまで見た彼女とこんなチャンスがくるなんてもう天にも昇りそうだ！

「…高橋美羽。
覚えておくよ。あたしの名前覚えている人がいたなんて、思っても見なかった。」
…やっぱり影がある。楓さんは一体何を抱えて生きてるんだろう、聞きたいことは山ほどあるが、緊張しすぎて言えなかった。
長い沈黙だった。

気がつくと、テーブルの上の領収書とてもに楓はお店から立ち去っていった。

満がきたのはその１０分後のことだった。

その喫茶店で、私が楓と話していたのを満が見ていたのかはわからないが、とにかく、満の期待していることはただ一つだ。
私が、楓を、セレナに会わせること。

二人の天使。（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございました。まだまだ続きます。

新しい風。

また、戦う夢を見た。
しかし、今日は違っていた。
今日は戦った相手に負けたのだ。
夢の中での楓は、立てなくなり、そこで夢から目が覚めた。

「…？」

腕を見てみると刃物で切ったような傷がついていた。
いつつけたんだろう、こんな傷。
長袖をつけていたのに…。

学校に行くと、また、あいつがいた。
「傷、ついたんだね。負けちゃったんだ。」
「…。」
「きっと嫌なことが起こるよ。でも君は乗り越えなくちゃ強くなれないんだよ。」
「あんた…。」
いいかけると、ふっと通り過ぎてしまった。
一体何者なんだろう。
でも、あのパーマ、顔つき、何故か懐かしい香りがする。

「楓さーん！！」

パタパタと足音がして、振り返ると、この間カフェで相席になった女の子が走ってきた。

えぇと、なんだっけ、み、、美羽だっけ。

「何？」

「あのっ、この間、ありがとうございました。ココアおごってくれて…」

「あぁ。」

しばらく沈黙していたが、勇気を出したように、美羽が口を開いた。

「あのっ、今週の土曜日、空いてませんか？連れていきたい場所があるんです。」

「断る。」

私は人が嫌いだ。なるべく誰とも関わりたくない。

しかし、美羽は食い下がらない。

「お願いしますっ！」

いつぶりだろうか。「必要」とされるなんて。私は今まで人を、避け続けてきた。こんな私を必要とする人間がいるなんて、信じられなかった。しかし、容易く人を信じるなんて出来ない。黙って考え込んでいると、美羽が紙を差し出した。

「私の番号とアドレスです。楓さんしか、頼める人がいないんです。お願いします。気が向いたら連絡してください。」

ポケットに手を入れたまま受け取るのをためらっていると、美羽が腕をつかみ、無理矢理手をとり、ぐしゃっと、紙を握らせた。

「待ってます。」

そう言い残すと美羽は立ち去っていった。

手帳を開いてみる。
学校の予定と、病院の診察日しか書かれていない、ほぼ真っ白な手帳だ。
土曜日、何の予定もなかった。
たまには外にでて、他人と触れ合うのもいいかもしれない。

月日はただ流れ、毎日同じリズムだったが、美羽の存在が楓の運命を変えていくことになることを誰もまだ知らなかった。

新しい風。（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございました。まだまだ続きます。

その顔は。

美羽はドキドキしながら待っていた。
まさか、本当に来てくれるなんて。
メールが来たときは嬉しすぎて子供のように万歳をしてベッドに倒れ込んだ。
先週、相席になったカフェでまた会える。
どんな顔して、声をかけようかな？
鏡をとりだし、笑顔をつくってみる。
うーん、なんか変。彼女みたいに美人な顔に生まれたかったなぁ。

＞i36057―4333＜

「あんた何してんの？」

はっと顔をあげると楓が冷たい目でみながら向かいの席に座っていた。

「いつの間に！？」

「いや、今さっき。」

「何か飲みます？」

「ココア。」

「好きなんですね、ココア？」

「なんで？」

「なんでって前も…」

気づくと楓はすでに店員にココア2つ、と注文していた。

「で、用件は何？」

楓にきかれてギクリとした。
絵のモデルになってほしいなんて、言ったら来てくれないだろうと思い、まだ伝えていなかったのだ。

「あの、ですね。友達が、そのー、絵のプロを目指していまして、すごく上手な絵を書くんですけど（見たこと無いけど）、今ブランクといいますか…書きたい絵があるそうなんですが、そのイメージに楓さんがピッタリなんですよ。だから、その、絵のモデルに、なってくれないかなー、なんて、ははは。」

どうしよう。
なんか険悪なムードだよね、これ。
どうしよう？

「いいよ。」

「えっ、！」

「じゃあ、いいよ。」

「えっ、どっちの意味ですか？！」

信じられなかった。

彼女は独り言のようにつぶやいた。
「他人がみる私が見てみたいから。」

美羽が連れてきたその子は、私の欲していた生命体そのものだった。
おもわず、その瞳を見入ってしまった。
＞ｉ３６０５８―４３３３＜

全く光がなかった。
「はじめまして、セレナよ。」
「どうも。」

にこりともしない彼女から、真っ黒なオーラが漂い、人への憎しみ、怨み、不安、依存、あらゆる感情が渦巻いてみえた。

「ごめんなさいね、汚くて。
あ、こっちに座ってくれる？
ただ、座ってるだけでいいわ。動いたり、
しゃべったりしても構わないから、楽に
してね。」

彼女は返事もせずに指定されたイスに座った。一緒にきた美羽は、キョロキョロとアトリエを見渡している。
アトリエには私以外にも何人かの画家が集まってくる。今日は私以外の画家は、米谷さんというオジサンだけだ。この人はかなり変わっている。無愛想だし、描く絵もかなり変わっている。

美羽は、米谷さんに近づいて挨拶をした。
「すいません。今日はお邪魔させていただきます。」
米谷さんは、絵を書いていた筆をとめずに、「よろしくー。」とだ

け返事をした。
美羽は、少し申し訳無さそうな顔をしたが、床に散らばっている絵をみるなり、
「あっ。」
と小さく叫んだ。

「どうしたの？」
私は美羽のそばによって視線の先をみた。
米谷さんが書いたたくさんの人物画だ。

「この人達って…。」

米谷さんは無反応のまま、時折パソコンの画面を見ながら絵を書き続けている。

「楓さん、楓さん。」
美羽は手招きをした。
楓は椅子から立ち上がり、美羽のそばにたち、絵を見た瞬間、表情が凍った。
「古川…」

古川のことはあの夢をみて、初めて一致した被害者だったので、ニュースで公開されていた顔を誰よりも覚えている。

散らばっている絵をかき集めると、最近ニュースで報告されている殺人の被害者の顔がいくつも書かれており、楓の夢と一致した殺され方をした人たちの顔が並んでいた。
もちろん、それ以外の顔もあったが、きっとニュースで公開されている殺人事件の被害者なのだろう。

「ニュースをみて書いてるんでしょうか…？」
美羽が怪訝な顔をして楓に問いかける。
楓は無視し、米谷さんのパソコンのほうへと移動した。
パソコンの画面が明るく光っている。

《殺したい非人道的な人間を公開処刑するサイト》
《皆さんの周りには、死に値するほど、非人道的なことをしてる人がいませんか？殺したいほど、憎い人がいませんか？
このサイトはそういう人の情報を公開するサイトです。
写真を載せてもかまいません。
どういった非人道的なことをしたのか、何故憎いのか、理由を添えることを原則とし、書き込んでください》

「僕はこのサイトに載ってる写真の人物画を書いているんだ。不思議なことに最近どんどん殺される人ばかりなんだよ。ニュースをみて書いてるわけじゃない。」
楓も美羽も言葉がでてこなかった。
ただ、今彼が書いている人物をくいいるように見つめていた。
きっと同じことを考えていたのだろう。

その顔は。（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。
まだまだ続きます（＊、∀、）

陽（ひだまり）の帰り道。

外はすっかり暗くなっていた。
冬の夜は、どうしてこうも神秘的な黒さを秘めているのだろう。
並んで歩いてみると、やけに小さい美羽の存在が、弟を思い出させて少し複雑な気持ちになった。

＞ｉ３６４５５―４３３３＜

「…なんか変な人でしたね。」

「米谷さんが書いた人、最近殺人事件や自殺で報道されてた人ばかりでしたね。
あのサイトに投稿した人が殺したんでしょうか…。」

「嫌な世の中ですね。」

美羽は、ぶるっと身を震わせて、ポケットのないニットをひたすらこすって両手を暖めていた。

「…だけど、人はいつか死ぬ。時期や、きっかけは、関係ない。」

それぐらいの言葉しかでてこなかったが、美羽は、少し気が紛れたように微笑んだ。

自分で吐いた言葉に、私は気分が悪くなった。頭では理解しているが、私はその現実を受け入れられずにいるのだ。受け入れられたら、きっと病院にも行かなくてすむかもしれない。

私がみる夢だって、毎日戦う。
ただ、戦うだけ。
人は生か死しかないのだ。

美羽と駅に向かうまで二人で歩いた。
美羽は、ありふれた日常を嬉々と話していた。それをオーバーにリアクションしたり出来なくて申し訳ないなと思った。
私はもともと感情表現が苦手だから。

ふと車窓から見えた公園の枯れ木に、思い出が蘇る。

―「陽、楓、もう帰るわよ。」
くせっ毛をかきわけながら、母が迎えにくる。
「まだー！もう少しー！」
兄さんが叫ぶ。

兄さんは、私にもう少し、頑張れ、と声をかける。小さな両手をぐっと握りしめ、私を応援している。

「楓ちゃん、頑張れ。」

気づくと、母も一緒になって応援していた。

私は一生懸命、逆上がりの練習をしていた。

寒くなって手が痺れていたが、どうしても逆上がりが出来るようになりたかった。
明日、学校で逆上がりのテストがあるからだ。意地になり、何回も練習したが、結局その日は出来なかった。
母も、兄も「よく頑張ったね。」以外、逆上がりについて何も言わなかった。
それがとても申し訳なくて、泣いた。
２人は悔しくて泣いているのだと思ったかもしれない。
すると母が頭をなでながら言った。
「楓、母さんはわかってるわ。あなたは優しい子だってこと。だからもう泣かなくていいのよ。」

陽（ひだまり）の帰り道。（後書き）

最後まで読んでいただきましてありがとうございます。
まだまだ続きます。

無情。（前書き）

キーポイントとなる展開です。グロ描写があります。

無情。

「お前には死んでもらう。」

今日の相手は人間だった。
その顔は見覚えのある顔だった。
話したことはないが、私は確実にこの顔を知っている。

「どうして死ななくちゃいけないの？」

相手は問いかけてくる。

「どうして？ねぇ、どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？どうして？…」

壊れたCDのようなその声に、楓は応えることもなく、自分の持っていた刀を相手に渡した。
相手は刀を受け取り、涙を流した。

「コレデ、楽ニナレルンダネ。」

自分の首を、自分で斬り、大量の血が噴き出した。返り血を浴びながら、静かに楓がつぶやいた。

「私がアイツを殺すまで戦いは終わらない。お前が一番殺したいやつは、お前が一番わかっているだろう？楓！！！」

「！？」

楓は目を覚ました。夢の中の私が、私に語りかけていた…。
私が殺したいやつ…。
母と兄、弟の翼を殺した…アイツ…
血まみれになりリビングの椅子にぐるぐると縛られたまま死んでいる母、母と同じ状態で縛られたまま内蔵をえぐられ、性器を切り取られた兄。
犯された後首を絞められ、ぬいぐるみのようにリビングに横たわって死んでいる弟。

悲惨な光景が脳裏に蘇る。

返り血をあび、真っ赤な顔で振り返るアイツ。

「いやぁあああああ！」

楓は急いで薬を探した。震える手で、やっとの思いで薬を胃に流し込む。
荒い呼吸を整えようと、必死でゆっくり息を吐く。
どのくらいその状態が続いたのだろうか。気づくと気を失っていたらしく、二時間の時が過ぎていた。
　電話がなる音がする。ぼんやりとした頭で電話にでる。

「楓さん…今日学校来てますか？」

「何泣いてるの？」

美羽だった。

「満が…楓さんは顔だけでも知ってますよね。私とよく一緒にいる子なんですけど。
満が…死にました。」

無情。（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。まだまだ続きます。

死につながる道。

「満が死んだ…。そう。」

私はなんとなく予知していた。今日見た夢に出てきた顔は満だったから。

自殺なんだろう。理由は分からないが、予知夢を見ることができる、ということにいよいよ確信がもてた。

「楓さん…学校にいないんですか？」

「いない。」

「夜会えませんか？」

「…」

会って何をすると言うのだろう。

友達が死んだ彼女を慰める言葉を、私はかけることができるだろうか？

一方で一緒に悲しむことなど、到底できない。

「ただ、会ってもらえるだけでいいんです。」

美羽が私の心を読んだのかと思った。

「それだけなら。」

美羽は、じゃあ、八時にこの間のカフェで。と告げ、電話を切った。

何か喉が渇いた。

冷蔵庫を開けると、ミネラルウォーターが所狭しと並んでいる。

食料は全くない。

生活感のない冷蔵庫だ。

ペットボトルからそのままミネラルウォーターをがぶ飲みする。
喉がごくごくと音を立て、体内に水を取り込んでいく。

部屋に戻ると、少年が立っていた。
「また…。」
楓は驚かずにベッドに座った。
「今日は何の用？」
もうこの少年に会うことに驚かず、冷静でいられる自分に少し驚いたが、薬がきいているのかもしれない。
それにどことなく、彼に対して懐かしい雰囲気が以前にも増していた。

少年はひどく優しい声で言った。
「もう怖がらないでいてくれるんだね。ありがとう。」
「今日は君に伝えたいことがあるんだ。
死人がでたね。でも君のせいじゃない。
君が夢を見たから死んだ訳じゃないんだ。」

「そうね。人はいつか死ぬ。」

「君はその言葉を、本当に受け入れているのかい？」

「どういう意味？」
腹が立った。
図星だったからだ。
人の死は、どれだけ時間が経っても受け入れられない場合がある。
私は家族の死を未だに受け入れられずにいる。
それが最もいい例だ。
身内であればあるほど、死は受け入れがたいものなのだ。

「君は、わからなくちゃいけないんだ。
全ての意味を。真実を。
逃げていてはいつまでも変わらない。」

楓はそのまま言い返せずにベッドに横たわった。
しばらくすると少年は姿を消していた。

「あ…。」
思い出した。
死につながる道を。
サイトだ。

楓は検索をかけた。米谷さんのサイトの名前を覚えていたので、簡単にヒットできた。

「…まさか」
＞i37322―4333＜

一昨日の書き込みに満の名前と顔写真があった。
「こいつは悪魔です。殺してください。」

死につながる道。（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。まだまだ続きます。波乱が…。

涙と怒りの狭間で。（前書き）

あけましておめでとうございます。
久しぶりの更新ですが、よろしくお願いします。

涙と怒りの狭間で。

「こいつは悪魔です。殺してください。
れいこくなこの人は、平気で嘘をつく。
はたらきもせず、親の金でのうのうと
じっかで暮らし、大学に行き、遊び、
つじつまのあわないことを言っては
けなし、陰口をいい、裏切ります。な
んでも自分の物にしたがり、人の彼氏
でも構わず奪います。
すぐに殺したい。私も被害者です。
本当に殺したい。人生が壊れました。
当の本人がのうのうと生きてるのが
にくくてしかたありません。
しんでしまえ。
ねがうのはそれだけです。」

大学で満をみかけることはあったが、いつも美羽や、その他大勢の
男女と楽しそうにしていた。
恨みを買うような子には見えなかった。
まぁ、私が無関心なだけで、実際はそういうことをしていたのかも
しれない。

だが、楓は気づいてしまった。
文字の奇妙な羅列。
ひらがな。
無駄に多い改行…。
この文章は

単純な暗号だ。

八時にカフェについたとき、美羽はすでにいつもの席に座っていた。

「楓さん…。」

美羽が姿を見るなり小さくつぶやいた。赤く腫れた瞼。充血した瞳。今日という一日で、どれだけ泣いたことか、安易に想像がつく。それは、友人が死んだ悲しみか、後悔なのかわからない。

「楓さん、私、友達が死ぬの、初めてで…。まだ信じられなくて…。」

美羽はひとしきり泣いた。

楓はそれを黙って見ているだけだった。

そうして、どのぐらい時が経ったのだろうか。

美羽が思わぬことを口にした。

「サイト、見ましたか？」

「米谷さんのサイトでしょ？」

楓は冷めたココアをすすった。

「私、あんなことがあったばかりだったから、もしかしてと思って、見てしまったんです。…そしたら書き込みが…。」

美羽はまた泣き出した。

「そうね。」

「でもね、楓さんの言葉を思い出したの。」
美羽が涙を流すのを止め、楓はココアをすするのを止めた。
周りの客のざわめきも、全く聞こえてこない。まるで世界は二人が主人公であるように動いていた。

「楓さん、言ってましたよね。
人はいつか死ぬって。
きっかけや時期とか、関係ないって。」
＞ｉ３８５０８―４３３３＜
美羽の瞳は輝いていた。

「ふふっ。その言葉にね、感動したし、共感したんです。楓さんと、共鳴したんですよ。
私達、一緒なんです。分かりますか？」
美羽が前のめりになって微笑みかける。
楓は直視しつつ、言い放った。

「私は誰とも共鳴なんかしない。
勝手に気持ち悪いこと言わないで。」
美羽は姿勢を元に戻し、ふぅっと息を吐いた。

「アトリエ、行ってみませんか？もしかしたら、米谷さんが絵を書いてるかもしれない。そしたら、何か書き込みした犯人に繋がるものが見つかるかもしれないですし。」

「あんたが書き込んでないって保証は？」

「そんなもの、どうやって証明するんですか？」
「じゃあ犯人見つけてどうするの？」
「次の殺人を止めます。」
「は？」
「だから、満のことを書いたってことは、私の周辺の人物です。大学内にいる可能性が高い。味をしめて、同じことをするかもしれないでしょ？だから、見つけて、捕まえるんです！！」
ショックで頭がおかしくなったのかと楓は美羽を疑った。
「そもそも、あの投稿は嘘です。でたらめです。満はそんなひどいことするような子じゃありません。
それに、楓さんも気づいたでしょう？
あれはただのじっけんだってこと。」
息をのむのを忘れさせるほど、先ほど泣いていた美羽とは別人だった。
美羽もメッセージには気づいていたのだ。
しかし、自分が犯人ではないことは証明出来ないという。
極めて怪しいのだが、楓は彼女についてアトリエにむかうことにした。

涙と怒りの狭間で。（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
まだまだ続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2085y/

パラサイトドリーム

2012年1月6日02時48分発行